

優秀賞 愛知県 廣瀬 慧子 様 (60代)

ちょうど1年ほど前、私はとても焦っていた。もうすぐ59歳になる。そして次は60歳、還暦だ。少し前の時代であれば、60歳となれば定年退職し、人生のセカンドステージの幕開けとなった。しかし、40歳直前で授かった子どもは2人とも未だ学生で、自立して手が離れるにはまだ数年かかるだろう。その上、実母は94歳で、同居していないとはいえ、通院や急な入院などにはお手伝いの依頼がある。私自身は、短大を卒業すると同時に会社に勤め、転職もパートタイム勤務も経験し、嫁いでは自営業の夫を手伝っている。これまで仕事や家事、子育て、夫の両親の介護と忙しく暮らしてきた。それなりに充実してはいたが、自分のための時間というものがなく、家族のために人生を生きているような気がしていた。世間からは「××さんちのお嫁さん」「△△さんの奥さん」「〇〇ちゃんのお母さん」と呼ばれるのみだ。今までの人生が、中身の詰まっていなかったらんどうのような気がして、空しさを感じていた。

ある日、「ねんきん定期便」という水色の封筒が日本年金機構から送られてきた。年に1度、ハガキでのお知らせは受け取っていた記憶がある。ところが、今回は大きな封筒で「お客様への大切なお知らせ」と大きく赤い文字で記されている。家事の合間にエプロンで手を拭いて、封を開けてみた。たくさん文字がある書類を斜めに読み飛ばし、何枚かめくって目に飛び込んできた書類を見て、胸が詰まりそうになった。そこには初めて就職した会社名、その後のパートの時代、そこで正社員になって現在の仕事につながる会社に転職し結婚……。今まで私が厚生年金や国民年金の保険料を納めた月数が、勤め先の会社名とともに記入してあった。年月をたどれば空白期間はなく、卒業してから今まで私は40年近く年金を払い続けていた。「頑張ったんだ、私……」そう小さく声が出て、涙があふれ出した。もう1枚ページをめくると、厚生年金保険料の納付額が、年度の月ごとに記入されていた。そして次は国民年金保険料のページ。「納付済」の文字が、整然と並んでいた。

ほとんどが結婚後の納付だから、25年を超える年月、毎月納めてきたことになる。私は思わずそのページをてのひらでなでていた。ここには間違いなく、社会人となってから

の私の人生がある。家族も知らない、私さえも普段は思い出もしないが、私自身が年金を納付し続けたことが確かに記されている。忘れずに誰かが記録し続けてくれた。ありがたいことだ。そのときなぜか「ねんきん君」という言葉が浮かんだ。それから「ねんきん君」は、ずっと私の人生の伴走者だ。右肩あたりにちょこんと座って、今日も私を見守ってくれている。なぜだか封筒と同じ水色のベストを着ているような気がする。

現在、私はご縁があって厚生年金保険料を払い続けている。60歳で国民年金を払い終えるのは、肩の荷が下りるような気がしていたが、こうしてまた払い続けることが出来るのは、健康である証拠だとも思っている。また、思いがけないことだったが、実は近い人が病気のために障害者となり、この度障害年金を受け取ることとなった。「みんなで支え合うシステム」という社会保険の考え方を、まさに身近に感じている。

そして今年、息子が就職した。通帳を見ながら「給料が少ない」と不満そうだったので、給料明細を見せてもらった。「会社から支給された金額はこれなの。そこから、いくつか引かれてその残りがいただけるの。20歳になったら年金に入る義務があるということは話したことがあったでしょう？学生の間はお父さんが代わりに保険料を払っていたけど、ここに、厚生年金と記載があるよね。社会人になったから、これからは自分で払っていくのよ。これは、老後の生活を支えることになるし、万が一何かあったらみんなで支え合うという仕組みになっているのよ。」

この先、彼は年金を納め続けるのだろう。それは将来のため、もしもの時のためではあるが、振り返ったときに彼の人生の軌跡となるだろう。ピンとこないな、とでも言いたげに給料明細を見る息子の右肩に、水色の物がチラッと見えた気がした。

「ねんきん君、今度は息子のことを頼んだよ！」